

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	俳句：文苑
Author(s)	楓谷；浩々；紫水；諫江；雲涯；松村；旭洲；天狗
Citation	龍南會雜誌， 8 3： 7 0 - 7 1
Issue date	1900-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5074
Right	

湖海云。詩筆穩秀。出新裁。扁舟春水。一路鷗鷺數句。妙於有意無意。
東郭云。風神婉約。一讀使人銷魂。王阮亭學唐賢。往々有如此者。

七十

六十八ページ東郭の評に○點を加へたるは印刷者の粗漏に付爰に正誤す
印刷者白

俳句

紫嘯吟社俳句(夜寒十句の中)。

裏門のしまり見に行く夜寒哉

楓谷

夜寒さや都大路の犬のころ

浩浩

人少き下等列車の夜寒かな

紫水

乳母訪うて歸る戸口の夜寒哉

諫江

裏表夜寒の門をどさしけり

蛭蛸をとり逃したる夜寒かな

引越すや夜寒の家の破れ疊

雲涯

遠方の火事を見て居る夜寒哉

瀛車を出て船に乗換ふ夜寒哉

新築の未だ往みなれぬ夜寒哉

内職のミシンの音や夜寒み

夜寒さの噓して行く寄席歸り

松・村

隣村に殺人ありて夜寒かな

柏手の祠にひくく夜寒かな

辻斬や夜寒の五條橋通

勘當の子か佗に來る夜寒かな

旭洲

犬の子の人になきよる夜寒哉

夜寒さの枕時計や枕元

轆々と車過ぎ行く夜寒かな

問世十句

天狗

横丁や御高祖頭巾の月明り

湯歸りや夜風冷き人の家

寒き夜を留守居の妻のやつれたる

時雨るゝや強てと妹の止めたる
 鞍に惱む姫や長屋の口惡き
 棟梁を中に新酒の宴す
 叫喚や霜夜の辻の人たかり

雜報

○天 長 節

萬歲聲裡、瑞雲腰帶として祥氣天地をつつむ時、
 こゝに我允文允武なる

天皇陛下の第四十九回の天長節を迎ふ。乃ち相
 共に慶して曰ぐ、草莽の微臣等何の幸ぞ、此に
 明治の聖世に生れ、聖澤の厚きに活き、以て太
 平熙々の世に謳歌するを得、何の言を以て恩徳
 に頌し、何の章を以て感謝を述べべきかを知ら
 ざるなりと。

思ふに明治三十三年は、我帝國の歴史に光榮あ
 るページを附加したるものなり。廣陵の貔貅は

君と婚す姫が蒲團を縫ふ身かな
 句を得ずして火鉢を擁す寒さ哉
 濁酒や裏屋の宵の騒しき

海を渡りて燕山の天地に馳驅し、列國強兵を出
 せる中に於て優に一頭地を抜き、天津に、北倉
 に、燕京に、到る處帝國の國威を輝かし、萬國
 をして我が日章旗に對し滿腔の感謝を注がしめ
 る。嗚呼これ帝國の歴史に於て空前の快事にあ
 らずや。

軍に従ふて燕山に入りしもの萬口一唱告げて曰
 く、皇澤海を越えて遼東に及び直隸に遍ねし、
 僻村の茅屋もなほ軒頭日章旗の飄るを見、我軍
 の赴く處庶民子來して用をなさん事を望み、王
 帥の向ふ處簞食壺漿す、これ實に言ふ可からざる
 快事にして、我が 皇の徳何ぞしかく蠢々たる
 清人をして、眷々たらしむる甚しきやと。余